DOI：10.20776/S24364231-45-P105

【書評】松村暢隆著（2021）『才能教育・2E教育概論：ギフテッドの発達多様性を活かす』東信堂

Book Review – Nobutaka MATSUMURA (2021) *Introduction to Gifted and 2e Education: Addressing the Developmental Diversity of the Gifted*

大西好宣*
ONISHI Yoshinobu

要旨　わが国における才能教育は、アメリカにおけるそれに比して極めて限定的な発展しか遂げていない。いわんや、才能と発達障害とを併せ持つ子供、いわゆる2E児を対象とした教育についてはさらに国内での認知度が低い。本書はアメリカ及びカナダの豊富な事例をもとに、その両者を紹介した稀有な研究成果である。本書は全８章から成り、次の三つのことが試みられている。一つは、同じ著者によるアメリカの才能教育に関する2003年発刊の啓蒙書に関する情報の更新、二つ目はより国内認知度の低いコンセプトである2Eに関する北米地域の最新報告と考察、そして最後に報告されるのは、才能教育及び2E教育に関する日本の現状と課題である。但し、主として心理学の視点による制度論的なアプローチであることが本書の限界とも感じる。例えば、才能児のためにどのようなカリキュラムが組まれ、教室でどのような授業を受けているのか、そしてそれらがどのような教育的効果を達成しているのかなどについて、残念ながら本書は多くを語ってくれない。教育学などの異なる視点による補完的アプローチが期待される。

１、背景

評者が才能教育という問題に朧げながら関心を持ち始めたのは、米国に本部を置く国際的な学会National Academic Advising Association（NACADA）に初めて参加した2016年の秋頃からである。NACADAとは、簡潔に言えば米国を中心とする大学の学修（習）支援専門職のための職能団体兼学会であり、近年は徐々に国際的な影響力を持ちつつある。当時、評者の勤務する千葉大学でも、米国を範とする学修支援専門職の本格導入が始まっており、そうした機会に本場・米国における実践を是非とも学んでおきたかったのである。

その後も、評者は継続的にNACADAの年次総会に参加し、二度にわたってNACADAの活動内容や関心事項について報告した（大西、2018及び2020）。詳細はそうした報告に譲るとして、アカデミック・アドバイザーと呼ばれる米国の学修支援専門職がどのような分野に関心を持っているかをまとめた表があるので、参考までに表 1 として掲げておく。

この中で評者の個人的な関心を引いたのは、2016年を除き毎年 1 位のセッション数を誇る「特定層への学修支援」という枠の中で、giftedというキーワードを含む幾つかのセッションが毎年実施されていたことである。日本では俗に「ふきこぼれ」と呼ばれ放任されがちな成績超上位層に対しても、学修上の支援を行うことが議論されているのは流石に公正・公平を重んじる米国ならではだと当時感じたことを思い出す。けれども、評者がさらに関

＊国際未来教育基幹教授

表 1　NACADA年次大会セッションの項目別分類とセッション数

2019 順位	分野/分類	セッション数			
		2016年	2017年	2018年	2019年
1	特定層への学修支援	69	79	96	80
2	訓練と開発	44	55	46	57
3	中退と学術上のスキル	76	50	59	51
4	学生発達、理論と研究	29	46	29	36
5	多様性、包摂、社会的公正	22	31	23	31

出典　大西（2020）p. 63の表 1 より上位のみ抜粋

心を引かれた理由は、表 1 の第 5 位にある「多様性、包摂、社会的公正」枠の幾つかのセッションでもgiftedが話題になっていたことであった。この枠は主として社会的弱者及び不利益を受けがちな少数者を対象にしており、giftedがそうした文脈で語られていることに些か違和感を抱いたのである。

そこで評者はこの問題への理解を深めようと、才能教育に関する国内の第一人者として知られる関西大学の松村暢隆による翻訳書『MI：個性を生かす多重知能の理論』（2001年、新曜社）、続いて当該分野における国内の基本文献である『アメリカの才能教育』（2003年、東信堂）を読んでみた。前者については書評風の論考も書いたが（大西、2019）、残念ながら、社会保障的な文脈でgiftedが語られることの理由はこの二冊を読んでも今ひとつ判然としなかった。

疑問が一挙に氷解したのは、同じ著者による『2E教育の理解と実践：発達障害児の才能を活かす』（2018年、金子書房）及び、より学術的な視点から書かれた本書『才能教育・2E教育概論：ギフテッドの発達多様性を活かす』（2021年、東信堂）を読んだ後日のことである。2021年の読売新聞による才能教育関連の一連の記事三編も大きな手助けとなった（後述）。

ここで言う2Eとは国内ではまだ耳慣れない言葉だが、著者の松村によればtwice-exceptionalの略で、類稀な才能と発達障害とを併せ持つ子供や若者のことを指す。NACADAのセッションで語られていた弱者としてのgiftedとは、まさにこうした人々のことだったのである。2021年 8 月 2 日の読売新聞記事では、さらに平易な日本語で「才能とともに学習面での困難も併せ持つ子供」と表現されている。

2、本書の概要と構成

本書では主に三つのことが試みられている。一つは、著者によるかつての著書『アメリカの才能教育』（既述）に関する情報の更新（第 1 ～ 4 章）、二つ目は新たなコンセプトである2Eに関する最新報告と考察（第 5 ～ 6 章）、そして最後に報告されるのは、才能教育及び2E教育に関する日本の現状と課題である（第 7 ～ 8 章）。全 8 章の見出しを参考として以下に掲げておく。どの章も概ね40頁前後であり、多くの専門書籍で見られるような章ごとの量的な側面における極端な凸凹はない。

第1章　才能の概念と発達多様性

1　才能に関する用語/　2　才能の定義/　3　多様な知能の理論/　4　創造性の概念/　5　発達多様性に応じる才能教育

第2章　才能児の多様な才能とニーズの評価

1　多様な才能識別のモデル/　2　才能行動の評価方法/　3　知能・学力・創造性の評価/　4　良く生きる知能、思考スタイルとMIの評価/　5　社会的多様性のある才能児のニーズの評価/　6　才能児の社会情緒的支援

第3章　才能教育の方法と早修

1　アメリカの才能教育の時代的変化/　2　才能教育の種類と早修/　3　早修の多様な措置/　4　早期カレッジ高校（ECHS）/　5　州立科学高校

第4章　拡充プログラム

1　全校拡充モデル（SEM）/　2　指導の個別化/　3　MI実践/　4　課外拡充プログラム/　5　G/Tプログラムの基準と評価

第5章　2Eの概念と教育の2E方策

1　2Eの概念/　2　2E教育の方法/　3　2Eのアセスメント/　4　才能伸張と学習支援の多層支援システム（MTSS）/　5　2Eと才能児の社会情緒的問題

第6章　2E教育の実践方法

1　2E教育の多様なプログラム/　2　公立学校の2Eプログラム：モンゴメリー郡公立学校/　3　公立中等学校の2E通級指導教室：GOLDプログラム/　4　2Eにも応じる発達障害対象の小規模な私立学校/　5　2E生徒を包括的に支援する私立学校：ブリッジズ・アカデミー/　6　発達障害学生への学習支援：アリゾナ大学SALTセンター

第7章　日本の才能教育の現状と課題

1　才能教育の経緯と議論/　2　大学早期入学（飛び入学）/　3　全ての生徒の個性を活かす指導・学習/　4　文部科学省指定・認定の高校拡充プログラム/　5　才能を伸ばすための学校外のプログラム

第8章　日本の2E教育の現状と課題

1　2E教育の認識の必要性/　2　広義の2E教育：得意・興味を活かす/　3　狭義の2E教育：学校で2E生徒の才能を活かす/　4　才能児・2E児の学校不適応とオルタナティブ教育/　5　2E教育の理念での発達障害高校生・大学生への支援/　6　不協和感のある才能児者（GDF）の社会情緒的問題

3、各章の内容についての概略

ここからは各章の内容について、その概略を見て行きたい。まず第 1 章は才能とは何か

を定義し、俗に言う天才や英才とどこが異なるのかについて真面目に論じている。いわば導入部にあたるが、既に記した通り他の章と比べ短くもなく長くもない。例えば、思考スタイルの13型など（22-23頁）、才能教育をめぐるこれまでの心理学上の功績が過不足なく紹介されている。その上で著者は、才能児について、英語ではgiftedという表現が一般的なので、日本でもギフテッドと呼称するのが良いと提案する。

第 2 章は才能児の評価・判定方法についてである。才能にはいわゆる学力の他にも、スポーツや芸術などの分野が含まれ、著者によれば学術的、科学的には才能を知能指数（IQ）のみで計測することには無理があるとかなり早くからわかっていたらしい。それにも拘わらず、実態としては21世紀の今でも、アメリカでさえ多くの場合IQが利用されているとの報告に驚きを禁じ得ない。

第 3 章は同じくアメリカの才能教育について、19世紀からの歴史的な経緯や発展が語られている。そこで描かれているのは、才能教育には浮き沈みがある（あった）という冷徹な事実である。ある時代にはそれがもてはやされ、また別の時代には一部の選良のための血税を使った特別な教育と見做され、世論の支持を失う場合もある。そして両者は繰り返す。まさに世の常である。

また個人的には、高名な心理学者であるレンズ―リの才能教育に関する進歩的な論文が、1970年代ではまだ早過ぎて、どの学術誌にも受理さえされなかったという本書88頁の記述が極めて興味深かった。他にも、同章第 5 節の州立科学高校に関する記述と、その応用である韓国の科学高校についてのコラムが興味深い。韓国の科学高校には評者も2010年代の半ば、ソウルやプサンの数校を訪問したことがあるからだ。才能教育のために設立されたアメリカの科学高校が、韓国に輸入された途端、才能教育という側面よりも、むしろ受験の方便として利用されているという当該コラムの指摘に思わずにやりとしてしまう。

多くの読者が理解しやすい、これまでの大まかな歴史を記述した第 3 章に比べ、続く拡充プログラムについての第 4 章は、才能教育の門外漢には少々わかりにくい高度な内容を含んでいる。ここで言う拡充とは、「生徒が通常カリキュラムの範囲を超えてより広く深く学習する指導・学習方法である」（127頁）。難解なのも当然で、例えば拡充プログラムの実践例として挙げられている多重知能（MI）については、それだけで書籍が 1 冊出版されているのだ（松村、2001）。

そうした中でも、評者が強く惹かれたのは142-143頁にあるグルーピングについての記述である。すなわち、才能児が最も安定した状態でその能力を存分に発揮出来たり、授業及び各種活動の学習効果が高かったりするのは、才能児のみ同士の組み合わせか、或いは才能児と通常児との組み合わせか、さらにその通常児も成績上位層と下位層のどちらの組み合わせがベストかなど、心理学ではこれまで実に多くの実証研究（実験）が繰り返されているのである。評者は教育学者としてその事実に圧倒され、心理学に対する大いなる敬意を覚える。

第 5 章は2E児及び2E教育に関する現段階での基本的な事項を余すところなく網羅し、第 6 章ではアメリカ及びカナダにおける様々な実践が個別具体的な事例と共に紹介されている。表面的に読めば、アメリカは日本よりも限りなく進んでいるなと眩暈すら覚えるだろうが、子細を読めばそのアメリカも地域によっては2Eに関して全く無関心という著者・松村の指摘に接し、「アメリカでは…」などと決して一括りには表現出来ないことを知る

だろう。

いずれにしろこの二つの章がおそらく本書の出版が決定された最大の理由であり、よって本書の白眉と呼んでも言い過ぎではないだろう。ただ繰り返すが、2Eとは非凡な才能と発達障害とを併せ持つ子供や若者のことを指し、より平易な言葉では「才能とともに学習面での困難も併せ持つ子供」と表現される（読売新聞、2021a）。よって2Eを扱うこの二つの章と後述する第 8 章には、広義の発達障害に関連する様々な臨床心理学上の専門用語が頻出する。例えば、学習障害（LD）や注意多動性障害（ADHD）、アスペルガー症候群などがそれである。おそらくそうした学術上の下地がない読者が、この三つの章を予備知識なしで読破するのはかなりの困難を伴うだろう。評者としては前もって、発達障害に関する入門書を何か 1 冊読んでおくことをお勧めしたい。どうしても時間がないという人は、本書第 1 章の前に記載されている略語一覧及び重要用語解説だけでも適宜目を通してほしい。

最後を飾る第 7 章と第 8 章は、それぞれ才能教育と2E教育に関する日本の現状や問題点について触れた章である。アメリカの現状とは残念ながらかなりの乖離があるというのは事実であろうが、それでも才能教育に関してはごく一部の飛び入学やスーパー・サイエンス・ハイスクール、スーパー・グローバル・ハイスクール、また国際バカロレア（IB）の導入拡大など、日本独自の発展を遂げていることが第 7 章から読み取れる。ただ、才能教育に関する専門書が少ない（251頁）という著者の指摘は研究者の一人として忘れてはなるまい。専門書が少ないということは、当該分野の研究実績が低調であるということとほぼ同義であろうから。他大学に先駆け、国内で初めて飛び入学制度を導入した千葉大学がなぜそうした研究の中心になれなかったのだろう。不思議である。

第 8 章で語られる2E教育に関する日本の現状は、まさにお寒い限りである。そもそも著者によれば、2Eという概念そのものが国内の教育関係者の間でさえまだ一般的ではない。公教育によって試みられる複数の実践も、著者によればアメリカとは違って一時的、散発的である。アメリカと同じ程度の比率で日本にも2E児が存在するであろうことは十分に予見出来るのだから、何らかの対策や受け皿の確保は急務であろう。それでも、著者が報告するように私塾やNGO/NPOを中心とした活動や実践が現在でも細々と存在すること、また読売新聞（2021a、2021b、2021c）が報道するように文部科学省もようやく重い腰を上げ、公式の議論を始めたという事実に評者は一縷の希望を見出す。

４、本書の限界と今後の課題

最後に本書の限界と今後の課題、というよりは評者からの注文について触れておきたい。まず、本書の基本的な性格は、心理学者である著者によるアメリカやカナダ、日本の才能教育及び2E教育に関する制度論的報告及び分析であり、それ以上でもそれ以下でもない。いわばそれが本書の限界と言っても良い。本書のタイトルには教育という単語が二か所登場するものの、決して教育学からのアプローチではないことを予め理解されたい。そのため、例えばアメリカや日本の教室において才能児が実際にどのような教育を受けているか、そのカリキュラムにはどのような科目があり、全体としてどのような内容か、それぞれのプログラムでどのような教育効果が確認されたかなどについては本書を通読しても殆ど情報がない。したがって、教育学の立場から本書を補完する意味での何らかの貢献、つまり

は異なる視点からの調査や研究・報告が間違いなく必要である。評者を含む教育学の専門家たちを対象とした今後の課題であろう。

もう一つ、評者として要望したいのはより広範な層に向けての新たな出版である。本書は部分的にかなり難解な内容を含む学術書、専門書として大きな価値を持つが、才能教育や2E教育がアメリカほどには一般的でない国情を考え合わせれば、より広範な層への浸透や認知度向上に向けた施策が必要であろう。例えばわが国独特の出版形式である、新書での出版を試みるのはいかがであろう。なおその際は是非、本書で散見される難解な日本語表記を改め（例えば301頁４行目には「2017年度後期から2019年度まで実施された」という主語のない、したがって意味の取れない文章が不思議なことに段落の冒頭にある）、一般の読者にもよりわかりやすい文章を心がけてほしい。

引用及び参考文献（アイウエオ及びアルファベット順）

大西好宣（2018）「アカデミック・アドバイジング（学修支援）の現在と未来：米国NACADA 2018年次大会に参加して」『大学マネジメント』14(8)37-45，大学マネジメント研究会

大西好宣（2019）「グローバル時代における多重知能理論の再考：研究推進のための予備的考察と提言」『人文公共学論集』(38)277-291，千葉大学

大西好宣（2020）「米大学における学修支援専門職の関心領域及び役割：日本への教訓」『JAILA JOURNAL』(6)58-70，日本国際教養学会

松村暢隆訳（2001）『MI：個性を生かす多重知能の理論』（ハワード・ガードナー著）新曜社

松村暢隆（2003）『アメリカの才能教育』東信堂

松村暢隆（2018）『2E教育の理解と実践：発達障害児の才能を活かす』金子書房

読売新聞（2021a）「『天才児』支援に力点　文科省会議が検討　対人の悩み　実態把握へ」（8月2日東京夕刊）

読売新聞（2021b）「異才の子　のびのび育て　愛大教授『ギフテッド』学習支援」（9月11日大阪朝刊）

読売新聞（2021c）「『異才』への教育　議論進む」（12月28日東京朝刊）